

宮崎県立看護大学大学院看護学研究科 平成23年度博士論文要旨

看護実践の自己評価の過程的構造

吹上大祐（理論看護学）

【キーワード】 看護実践, 判断根拠, 自己評価, 理論の適用, 自己評価指標

本研究の目的は、看護は理論を適用しつつ実践し自己評価しながらそのレベルを向上させていく専門職であると教育された自己の卒後7年間の総括し、その過程的構造を明らかにして成長過程を促す自己評価のあり方について示唆を得ることである。研究対象は、看護できた実感したが、その判断根拠を表現できなかった卒後7年間の看護実践における看護者（自己）の認識とした。研究方法は、まず、研究対象とした看護実践をプロセスレコードに再構成し、その時「どのような事実が浮かんできたか」を想起して追記し、看護実践の論理を抽出して研究素材とした（15事例18場面）。研究素材のうち、看護者と対象の目標像の重なりを共有できた事例が、看護理論の修得レベルがこれまでで最も高いレベルに達したと判断し、その看護実践の自己評価から、自己評価の分析指標（5項目）を抽出して、作業仮説とした。次に、各研究素材を分析して自己評価の特徴を取り出し、これを分析指標に照らして、共通性と相異性を検討し、経年的変化の特徴を取り出した。これより、看護専門職者としての成長過程を吟味した結果、以下の看護実践の自己評価の過程的構造8過程が明らかとなった。

【看護実践の自己評価の過程的構造】

1. 対象の事実から対象特性を捉えていく過程

1) 対象の事実の意味を、発達段階、健康障害の種類、健康の段階、生活過程の特徴の視点で捉えている

2. 対象の事実から対象の看護の必要性を捉えていく過程

1) 看護の評価を行えない時には、どのように看護の必要性を捉えていたかを振り返っている

2) 常に、対象の事実生命力の消耗はないかといひかけながら、生命力の特徴を捉えている

3) 対象の事実やニーズのその人にとっての意味を捉えている

4) 対象への目的意識的な取り組みを通して看護者自身の人間観が培われている

3. 対象への立場の変換を重ねていく過程

1) 自己の看護実践を看護するために、対象への立場の変換ができない時には、認識を形成してきた生活過程や、対象に意識的に問いかけている

4. 対象の看護の必要性に即して関われるように看護者の人間観を重ねていく過程

1) 対象の看護の必要性に即して関われるよう、対象を生きかつ生活している人間としてみつめている

2) 対象の持てる力に感動したことや人間の力のすごさを感じたこと、自己の人間観を看護スタッフ間で共有している

5. 対象の看護の必要性に即した看護者の経験を想起して、表現に活かしていく過程

1) 対象の事実から、直接看護上の問題として捉えられないときには、一旦、自己の経験や人間観とつき合わせてその意味を捉えている

2) 対象の認識に関心を寄せ、対象に表現しようとしていることの意味を捉えている

6. 対象の事実から捉えた意味をつなげていく過程

1) 対象の事実の意味をつなげて捉えられず失敗した場面を自己評価し、次の実践に役立てようとしている

7. 看護者として放っておけない感情が湧き起こる過程

1) 自己の判断過程とその根拠のつながりを捉えることで、対象への看護者として放っておけない感情

が湧き起こっている

8. 対象と夢を共有する過程

- 1) 看護者の表現に、目標像に向かって対象とともに歩む姿勢が表れている

さらに、以上の8過程の共通構造として次の過程が明らかとなった。

<看護者が自己の判断過程を客観視しながら成長していく過程>

- 1) 自己の判断が自分流ではなく、相手の立場から考えられている
- 2) 判断過程のつながりを意識できている

以上より、看護者が一貫して把持していた判断根拠や看護専門職者の成長過程を促す自己評価のあり方について考察したところ、看護実践の自己評価の過程的構造を促す自己評価指標（大項目1中項目8小項目15）が導き出された。この指標に照らして、看護者が自己の判断過程を客観視しながら看護理論の修得段階を高め、培われてきた人間観との相互浸透を含めて評価していくことを通して成長が促されると示唆を得た。